

「不満への回答」——イクバルのウルドゥー詩(6)——

松村 耕光* 訳

はじめに

本稿は、ムハンマド・イクバル (Muhammad Iqbal 1877-1938) のウルドゥー詩「不満への回答 (Jawāb-e Shikwah)」の全訳で、前回訳出した「不満 (Shikwah 1911 年)」の続篇である¹⁾。

この詩は、1913 年、ラホールのモーチー・ダルワザー (Mōchī Darwāzah) で反英ジャーナリスト、ザファル・アリー・ハーン (Zafar ‘Alī Khān 1873-1956) がバルカン同盟と戦うオスマン・トルコを支援するために開いた集会でイクバル自身によって朗読された²⁾。

第1ウルドゥー詩集『鈴の音 (Bāng-e Darā 1924 年³⁾)』に収録されるに当たって詩句の変更、連の削除、連の配置変更が行われた。本稿では詩集『鈴の音』に収録された「不満への回答」に基づいて翻訳を行った⁴⁾。

本詩「不満への回答」も、「不満」と同じムサッダス (musaddas) 詩型で、6 行 (6 半句) が1 連を形成し、36 連で構成されている⁵⁾。

前回訳出した「不満」は、なぜ神はムスリムを見捨て、ムスリム以外の者たちに情けをかけるのか、と恋人の心変わりを責めるかのように神に不満を述べる内容の詩であったが、「不満への回答」は、そのような詩人の不満に神が答えるという内容の詩である。神の口を借りて、イクバルはムスリムの堕落を批判するとともに、窮状打破の方法を提示しており、イクバルがムスリムの状況についてどのように認識し、どのような解決策を考えていたかを知る上で非常に重要な作品である。

* 大阪大学大学院言語文化研究科教授

1) 「不満」と「不満への回答」の英訳には以下のようなものがある。

A. J. Arberry, tr., *Complaint and Answer of Iqbal*, Lahore, 1955.

Khushwant Singh, tr., *Complaint and Answer: Iqbal's Dialogue with Allah*, Delhi, 1981.

2) 第1次バルカン戦争は、1912年8月に始まり、1913年5月まで続いた。

3) 前回訳出した「不満」の「はじめに」では詩集『鈴の音』の出版年が1824年となっているが、1924年の間違いである。

4) 「不満への回答」は「不満」の続篇であるが、詩集『鈴の音』ではこの二つの詩の間に14の詩が挟まれている。

5) 脚韻構成はaaaabbで、連ごとに脚韻は変更可能である。

不満への回答

心から発せられる言葉は力を持ち
翼はないが飛翔することができる
清らかなので高みに向かい
地上を発って天上に達するのである
私の恋はおとなしくはなく、反抗的で、機敏であった
私の大胆な嘆きは天を引き裂いた

私の嘆き声を聞いて年老いた天は言った——誰かいる
星が言った——天上界に誰かいる
月が言った——いや、地上の者がいる
銀河が言った——誰かここにいる
私の嘆き声であることを何とか理解し得たのは天国の番人であった⁶⁾
彼は私が天国から追放された人間であることに気づいた

天使たちも驚いた、一体誰の声か、と
天上界の者たちにも解らなかった、何事が起きたのか
天上界にまで人間は来ることができるのか
一握りの土塊^{つちくれ}にも飛翔が可能となったのか⁷⁾
地上に住む者たちは何と礼儀知らずなのか
低いところに住んでいるこの者たちは何と不遜なのか

神様にすら腹を立てるとは
天使の跪拝の対象だった、これがあの人間^{アダム}なのか
物の性質を知り、量の秘密を知ってはいるが⁸⁾
慎み深さというものをまったく理解していない
人間たちは言葉の力を誇っているが
愚か者たちは話の仕方を弁えてはいない

すると声がした——おまえの話は涙を誘う
おまえの盃は震える涙で満ち溢れている
おまえの激しい叫び声は天に響き渡った
おまえの狂った心は何と生意気な口をきくことか
しかし美しい表現でおまえは嘆きを飾り
^{にんげん}奴隷たちを神と対話させた

6) 天国にはリズワーン (Rizwān) という名の番人がいる。

7) 「一握りの土塊^{つちくれ}」 人間のこと。

8) 世界の知識は持っているが、ということ。

恩寵を与えたいが、求める者がいない
歩く者がいないのに、道を示すことができようか
教えは行き渡っているのに、受け入れる能力がない
もはやアダムになれる土はない
ふさわしい者がいれば王者の威光を受けるであろうに
求める者には新しい世界を受けるであろうに

手には力なく、不信仰に心は慣れ親しんでいる
ムスリムたちは預言者ムハンマドの名を辱めている
偶像破壊者は去り、偶像制作者が残った
父はアブラハムであったのに、息子たちはアーザルとなった⁹⁾
飲酒する者も酒も酒甕も変わった
カアバ神殿も偶像もおまえたちも変わってしまった

私こそが美の源であった時代があった
花の季節は砂漠のチューリップを誇りとしていた
ムスリムは神を恋い慕っていた
かつておまえたちが慕っていたのはこの「浮気者」であった¹⁰⁾
今度は誠実な者と主従の契りを結ぶがよい
預言者ムハンマドに従う者たちをどこかに縛りつけるがよい

朝早く起きるのをおまえたちは厭わしく思っている¹¹⁾
私を恋い慕ってなどいない——眠りの方を愛おしく思っている
おまえたちの気儘な心は断食月の決まりを重荷と感じている
おまえたちこそ答えるがよい——それが忠節の道なのかどうか
ムスリム共同体は宗教に依拠し、宗教がなければおまえたちも存在しない¹²⁾
引き合う力がなければ、星の宴も存在しない

何の技能も持たない人間——それがおまえたち
自分の住処を気につけない人間——それがおまえたち
稲妻が潜む、刈り取られた作物——それがおまえたち¹²⁾
先祖の墓を売って食いつなぐ人間——それがおまえたち
墓の売り買いで名を成したのであるから
石の偶像が手に入れば、それを売ろうとはしないであろうか

9) 偶像破壊者アブラハム（イブラーヒーム Ibrāhīm）の父アーザル（ĀzarあるいはĀdhar）は偶像制作者であった。

10) 「浮気者（har-jāʿ）」詩「不満」の次の句を踏まえている。
神様は私たちとも、他の者たちとも付き合っておられます
口にすべきことではないのですが、神様もまた誠実ではないのです
（「神様もまた誠実ではないのです」の部分直訳すると、「神様もまた浮気者なのです」となる。）

11) 早朝の礼拝を疎んじている、ということ。

12) 内部に危険を抱えている、ということ。

世界から不正を消し去り
人類を隷属から解放したのは誰であったか
我がカアバ神殿を額づく額で満たし
我がコーランを抱きしめたのは誰であったか
それはおまえたちの先祖であった——しかしおまえたちは
手をこまねいて明日が来るのを待っているだけではないか

天女は約束されているだけ、などとよくも言えたものである
不当な不満を言うにしても限度というものがある
公正さこそ世界創造者の始原からの原則である
ムスリムのしきたりに従い、異教徒は天女と邸宅を得たのである
天女を望む者すらおまえたちの中にはいない
シナイの山に輝きはあるが、モーセはいない¹³⁾

ムスリムの損得は共通であり
預言者も教義も信仰も共通である
聖地も神もコーランも共通である
素晴らしいことであったのに、ムスリムが一つにまとまっていれば
分派があるかと思えば階層の区別がある
そのような有様で繁栄できているのか

私が選んだ使者の掟を捨てたのは誰か¹⁴⁾
日和見主義を行動の基準にしたのは誰か
余所者のならわしに目を奪われたのは誰か
先祖のならわしに嫌悪の目を向けたのは誰か
心には情熱がなく、魂には生気がない
預言者ムハンマドの預言を尊重する気持ちがおまえたちにはない

モスクで礼拝の列を作っているのは貧しい者たち
断食の苦しみに堪えているのは貧しい者たち
我が名を唱える者がいるとすれば、それは貧しい者である
おまえたちの欠点を隠してくれる者がいるとすれば、それは貧しい者である
富んだ者たちは富に酔い痴れ、私のことを忘れている
ムスリム共同体が存続しているのは貧しい者たちのおかげである

ムスリムの説教者にはもはやあの思考の成熟はない
稲妻のような激しさはなく、焰のような弁舌もない

13) 神の輝く姿を見ようとする者がいないということ。

14) 「私が選んだ使者」 イスラームの預言者ムハンマドのこと。

礼拝開始の告知は行われているが、ビラールの精神は残っていない¹⁵⁾

哲学は残ったが、ガザリー（ガザーリー）の教えは残っていない¹⁶⁾

モスクは嘆いている——礼拝者がいなくなった、と

ヒジャーズの徳を具えた者がいなくなった、と¹⁷⁾

大きな声がする——世界からムスリムが消えた、と

私は言う——ムスリムなどどこにいたのか、と

格好はキリスト教徒と同じで、文化はヒンドゥー教徒と同じではないか

これがムスリムなのか——見ればユダヤ教徒ですら恥入るではないか

サイイド（サイイド）がおり、ミルザー（ミルザー）がおり、アフガン（アフガン）がいる¹⁸⁾

答えるがよい、ムスリムもいるのかどうか

ムスリムは恐れることなく真実を口にしていた

確固たる正義感があり、妥協することはなかった

ムスリムという樹木は自尊心で瑞々しく

ムスリムは類まれな勇気を持っていた

その酒がもたらす酩酊（めいてい）は我執を消し

その盃（さかずき）は常に己を空（から）にしていた¹⁹⁾

ムスリムは虚偽の血管を切り裂くメスであった

その生涯の鏡は行動の光で光り輝いていた

頼みとしていたのは自分の力であった

おまえたちは死を恐れているが、ムスリムは神を恐れていた

父の教えを子が覚えていないのであれば

子はどうして父の遺産の継承者になれるであろうか

すべての者たちが安楽の酒に酔い痴れている

おまえたちはムスリムなのか、これがムスリムの生き方なのか

アリーの清貧もなく、ウスマーン（ウスマーン）の富もない²⁰⁾

先祖とどのような精神的な結びつきがあるのか

あの者たちはムスリムであるがゆえに尊敬されていた

おまえたちはコーランを捨てて笑いものとなった

おまえたちは互いにいがみ合うが、あの者たちは慈しみ合った

15) ビラール (Bilāl) はエチオピア系ムスリムで、イスラーム最初期の入信者。美声の持ち主で、礼拝開始を告げ知らせる係を務めたことで有名。

16) 「ガザリー」 著名な宗教思想家アブー・ハーミド・ガザリー (Abū Ḥamid Ghazālī 1058–1111) のこと。

17) 「ヒジャーズの徳」 初期アラブ・ムスリムが具えていた徳。

18) サイイド (Sayyid) はイスラームの預言者ムハンマドの子孫。ミルザー (Mirzā) はムガル (Mughal) 王家などの高貴な血筋の者。

19) この連の最後の2行はペルシア語。

20) アリー (‘Alī ?–661) は第4代カリフ。ウスマーン (Uthmān ?–656) は第3代カリフ。

おまえたちは過ちを犯し、過ちを探すが、あの者たちは過ちを庇い、情け深かった
誰もが昂の高みに昇りたいと望んでいるが

それならば、まず、あの清らかな心を持たなければならぬ

中国の王座もベルシアの王座もあの者たちのものであった

口先で言っているだけなのか、あの者たちのような志があるのか

おまえたちは自己を破壊するが、あの者たちは自己を保持した

おまえたちは友愛を避けるが、あの者たちは友愛に身を捧げた

おまえたちは無駄口をたたきただけであるが、あの者たちは行動を起こしていた

おまえたちは書を求めるが、あの者たちは薔薇園を持っていた

今でも世界の人々はあの者たちのことを覚えている

世界の頁には誠実なあの者たちのことが明記されている

星のように諸民族の地平線上に姿を現したおまえたちは

インドの偶像を愛するあまりバラモンになってしまった

おまえたちは飛ぶことに夢中になって巣を離れ

若者たちは行動を起こさないどころか、宗教に疑念を持つようになった

新しい文化は彼らをあらゆる束縛から解き放ってしまった

カアバ神殿から連れ出し、偶像寺院に住まわせてしまった

カイスは砂漠の孤独に堪えようとはしなくなった²¹⁾

町を散歩するようになり、砂漠の放浪者ではなくなった

彼は町にいようといまいと恋の狂人である

大事なものはライラーの顔からベールがとられることである

恋しい人の横暴や冷酷さに不平を言うのはもうたくさんである

恋は自由になった、したがって美も自由になればよいではないか……²²⁾

現代という時代は刈り取られた作物を焼き尽くす稲妻である

砂漠も薔薇園も無事ではいられない

年老いた民族や共同体はこの燃え上がる焔の燃料である

最終預言者に従う者たちの服にも火が燃え移っている²³⁾

今、アブラハムのような信仰心が生まれれば

焔は薔薇園の光景を見せるであろう²⁴⁾

21) カイス (Qais) は有名なアラブ悲恋物語の登場人物。美女ライラー (Lailā) を恋するあまり発狂し、ナジド (Najid) の砂漠をさ迷い歩く。カイスはマジヌーン (Majnūn ジンにとりつかれた狂人) とも呼ばれる。

22) 「恋」は求愛者、「美」は恋しい人を意味する。西欧文化の影響を受けた者たちが自由な恋愛——過度の自由——を求めるようになったことが示されているように思われるが、この連の最後の2行は次のように訳することも可能である（この場合、「恋」は墮落したムスリムを、「恋しい人」や「美」は神を意味する）。

恋しい人の横暴や冷酷さに不平を言うのはやめよ

恋は自由になった、したがって美も自由になってよいではないか

23) 「最終預言者に従う者たち」 ムスリムのこと。

24) ニムロド (ナムルード Namrūd) はアブラハム (イブラーヒーム) を焼き殺そうとしたが、神助により焔の海は薔薇園となった、という物語に基づいた詩句。

庭師よ、薔薇園の現状を見て心を乱してはならぬ
星のような蕾によって枝は輝きだそうとしている
薔薇園から枯れ葉が消え
殉教者たちの真っ赤な血潮が振り撒かれている
仰ぎ見てみよ——天は紅に染まっている
現れつつある太陽が地平線を輝かせているのである

世界の庭園には果実を得た民族・共同体もあれば
果実を得なかった民族・共同体もあり、秋を目にした民族・共同体もある²⁵⁾
痩せ細った樹木もあり、大きく成長した樹木も
庭園の胎内でまだ眠っている樹木もある
イスラームは繁栄の果実を実らせる理想の樹木である
それは数百年に亘って庭園の世話をした結果得られた樹木である

おまえの裾は国土という泥で汚れていない²⁶⁾
おまえはエジプト全土をカナンとするヨセフ²⁷⁾
おまえの隊商は人数を減らしたりはしない
鈴の音の他、おまえは何一つ荷物を持ってはいない²⁸⁾
おまえは蠟燭の樹木であり、おまえの命の管は焰の只中を通っている
おまえの思想が落とす影は遂には焰となるのである²⁹⁾

イランが消えてもおまえが消えることはない³⁰⁾
酒のもたらす陶酔は盃とは無関係である
タートル人による侵略の歴史は明らかにしている
カアバ神殿が偶像寺院から守護者を獲得したことを³¹⁾
この世で真理の舟を守っているのはおまえである
この暗黒の時代に灰かに光る星——それがおまえなのである

ブルガリア人侵攻が引き起こした騒動は³²⁾
眠れる者たちに目覚めよと告げている
心を苦しめる出来事であるとおまえは考えているが

25) 「秋を目にした」 衰退した、という意味。春が誕生、歓びの季節であるのに対し、秋は衰退、哀しみの季節である。

26) 「国土」 原語は故郷、祖国という意味の *watan*。

27) ヨセフ（ユースフ *Yūsuf*）はカナンの出身。兄たちによって野井戸に投げ入れられるが、隊商に拾われてエジプトに連れて行かれる。

28) 「鈴の音」 隊商のラクダが付けている鈴の音。イスラームの教えを意味している。

29) この連の最後の2行はペルシア語。ムスリムはイスラーム信仰の焰で世界を輝かせ、世界各地にイスラーム信仰の焰をもたらす、という意味。

30) ロシアやイギリスによるイラン支配に言及している。

31) アッバース朝を滅ぼしたモンゴル人がムスリムとなったことを指している。

32) 第1次バルカン戦争（1912-13）に言及している。

これはおまえの犠牲精神に対する、自尊心に対する挑戦なのである
何故敵の馬の嘶きを恐れるのか
敵の息で真理の光は消えたりしないのである³³⁾

おまえの本当の姿は世界の人々には見えていない
世界の宴はまだおまえを必要としているのである
時代を生かしているのはおまえの熱気である
おまえの統治は可能性を秘めた運命の星である
安閑としている時間はない——なすべきことがある
一神教の光を遍く届けるという仕事が残っている

おまえは薔薇に囚われた芳香である——広がらなければならぬ
花園のそよ風に運ばれなければならぬ
みすばらしいと思うなら、砂粒ではなく砂漠となるがよい
波の小唄ではなく、荒れ狂う嵐の轟音となるがよい
恋の力で低き者を高くせよ³⁴⁾
ムハンマドの名で世界を光り輝かせよ

この薔薇がなければ、夜鶯^{フルフル}の歌もなく³⁵⁾
世界の花園には薔薇のほほ笑みもない
この酔人^{サーキー}がいなければ、酒もなく、酒甕もなく
一神教の宴もなく、おまえもいない
天の天幕があるのはムハンマドの名のおかげである
世界が激しく脈打っているのはこの名のおかげである

ムハンマドの名は荒野に、山麓に、平野に
海に、波の懷に、嵐の中にある
中国の町、マラケシュの荒野に
ムスリムの信仰の中にある
世界の人々は永遠に見続けるであろう
「私はおまえの名声を高めた」の句が高みで輝くのを³⁶⁾

大地の瞳、すなわちあの黒い世界は³⁷⁾
殉教者を育むあの世界は
太陽の熱で育てられた新月の世界は

33) コーランの次の句を踏まえている。「彼らはみずからの口をもって神のみ光を消そうとしている。しかし、たとえ背信者どもが嫌っても、神はかならずみ光をまっとうしたまわずにはおかれない。」(悔い改めの章、32節)

34) 恋は熱烈な信仰を意味する。

35) 「この薔薇」 イスラームの預言者ムハンマドのこと。

36) 「私はおまえの名声を高めた」は、コーラン、拡張の章、4節からの引用。

37) アフリカのこと。

恋する者たちがビラルの世界と呼んでいる世界は
ムハンマドの名によって水銀のように激しく震え
瞳のように光の中に飛び込むのである

理性はおまへの盾であり、恋はおまへの剣である
我が托鉢者よ、おまへは世界の統治者である
神以外のものにとって神を賛美するおまへの声は焰である
おまへが真のムスリムであるならば、おまへの望みが運命となる
ムハンマドに忠誠を尽くしたならば、私はおまへの味方となろう
この世界など何ほどのものか——紙とペンはおまへのものである³⁸⁾

38) 「紙とペン」 運命を書き記す紙とペン。